

第1部会

第一部会

イタリア宗教史学派の形成

江川 純 一

イタリア宗教史学の歩みはラッファエーレ・ペッタッツォーニの生涯と重なる。イタリアにおいて「religioni (諸宗教)」という概念を掲げ宗教と人間の関わりをみるという学問を主張したのはペッタッツォーニと彼に付き従った面々だけであった。本発表では彼らをイタリア宗教史学派（より正確にはペッタッツォーニ学派）と捉え概観したい。

一九一二年にペッタッツォーニは『サルデーニヤの原始宗教』を刊行する。当時彼はローマの考古学博物館に勤務していたが、この本の中で既にイタリアにおける宗教史学の必要性を訴えている。その宗教史学が大学教育の中で正規のポストを得るのはファシスト政権が成立した翌年の一九二三年であり（講義は二四年から）、以後彼は一九五三年の退官までローマ大で宗教史学の研究・教育に携わることになる。講座開設後十年が経過した頃、後にペッタッツォーニの後継者となる学生たちが現れ始める。三十年代にはエルネスト・デ・マルティノーとアンジェロ・ブレリチ、四十年代にはウーゴ・ビアンキとヴィットーリオ・ランテルナリーがペッタッツォーニのもとで学んだ。

ペッタッツォーニとその後進たちのあいだで共有されていたものを三点挙げる事が可能である。一点目は「宗教的なもの」「聖なるもの」を人間の所産として捉えることである。これはペッタッツォーニの全研究を貫いていた視点であり、彼の学問にとって神学との差異を強調する上で譲れない点であった。ペッタッツォーニは「宗教的なもの」や「聖なるもの」を人工的なものとして否定的に捉えていたのではなく、人工的なものであるからこそ価値があり重要だと考えていた。さらに、それらは人間の歴史的営みの中で形成されたものだからこそ人文学の対象であると捉えていた。

二点目は、歴史的コンテクストを最重要視することである。宗教史における進化主義的解釈や伝播主義的解釈、さらには原始一神教説に代表されるような歴史を考慮したと主張する決定論的な宗教論を否定し、個々の歴史的コンテクストをみていく宗教史学の流れを作ったのはペッタッツォーニ学派である。人類学的アプローチ、社会学的アプローチ、心理学的アプローチなどの寄せ集めではなく、それらの成果を歴史というフィールドに位置づけて初めて宗教史学だと彼らは考えていた。「宗教的なもの」や「聖なるもの」を歴史的に限定付けられたものとして捉え、社会的・経済的条件との関わりで検討するという点をこの学派の特徴としてあげることができよう。

三点目は比較の可能性を常に念頭に置くことである。ペッタッツォーニは宗教を自律的領域として捉えていたが、それは他の社会事象と複雑に絡んでいるとした。故に宗教の構成要素（神話、儀礼、最高存在への信仰、犠牲、祈り、聖職者、終末

論など)を抽出するために、異なる歴史の線上にある事象との比較が必要であると考えたのである。さらに、一つの現象の比較にとどまらず、時間における諸現象の連なりについても比較を行うことも主張されている。

社会的・政治的コンテクストへと目を向けると、ペッツォーニの「宗教的自由」運動に代表されるように、イタリアの宗教史学はカトリックのヘゲモニーへの対抗手段という側面を有していたということが明らかになる。デ・マルティーノやラッセル・ナリーが行った南イタリアにおけるフィールドワークの出発点にも、南部にみられる呪術的な諸事象がカトリック信仰と比べ劣ったものとされている状況への憂いがあったと捉えるべきであろう。

オットー宗教史学の方法論再考

澤井義次

ルードルフ・オットーはみずからの神学研究に比較宗教学的な視点を取り込み、宗教の進化図式を保持しながら、宗教の多元的發展の歴史という一つの宗教史の「語り」を提示した。今回の発表はR・オットーの宗教史に関する「語り」をめぐって、オットー宗教史学の方法論とその問題点を明らかにし、宗教史研究のあり方を再考しようとする宗教解釈学的な試みである。

オットーは異文化への旅をとおして他宗教との出会いを経験した。彼は世界の諸宗教伝統を射程に入れながら、キリスト教神学を熟考するルター派神学者、あるいは宗教学者であった。オットー宗教史学の構築にとって、彼の東洋への旅、とりわけインドへの旅は大変重要な契機となった。彼はキリスト教神学および宗教哲学の視点から、人間が本来的にもつ宗教の本質を省察すると同時に、比較宗教学的な視点から東洋の宗教史の中に、特にインドの宗教史の中にその具体的な宗教現象を探究する過程で、独自の方法的視座を構築していった。彼はキリスト教神学および宗教哲学の視座のうえに、宗教史学の視座を重ね合わせていった。彼は生涯を通じて、みずからをキリスト教的の神学者として意識していたが、彼の宗教史学はキリスト教的パースペクティヴによって再構成された、いわば宗教史の「語り」であった。

東洋の宗教の中でも、オットーはヒンドゥー教伝統に注目した。特にヴィシュヌ派の宗教伝統をインドの「恩寵の宗教」として捉えることによつて、彼はそれが西洋のキリスト教とパラレルをなすと解釈した。そうした宗教解釈学的な視座がその射程内に取り込むことができたのは、ラーマヌジャの思想やヴィシュヌ派の信仰現象によつて代表される、いわゆる「バクティの宗教」とその思想であった。そのことはオットーのインド宗教研究がキリスト教的な諸概念的枠組みに依拠しすぎたために、インドの宗教現象や宗教思想をその全体像の中で理解できなかったことを物語っている。

オットー宗教史学で用いられた宗教概念は、近代西洋の宗教